

西洋における18世紀後半の知識人たちの音楽レパートリー Karl Heinz Ludwig Poelitz を例に

小野 亮 祐

(本講座大学院博士課程後期在学)

1. はじめに

近世ドイツにおいて知識人たちの音楽活動が盛んであったこと、そしてこれが後の音楽の行方に大きな影響を与えたことはよく言われることである。しかし、その音楽活動の中で彼らがどのような楽譜、レパートリーを有し、どのようなジャンル、規模の音楽を行っていたかその傾向を一次資料までさかのぼって細かく探る作業はほとんど見かけない。その原因としてこういった「公」ではなくむしろ「私」のものはあまり記録に残りにくく散逸して、主要な研究対象として見なされなかったからであろう。

そこで本論では18世紀後半から19世紀前半の知識人であるKarl Heinz Ludwig Poelitzの楽譜コレクションを中心に用いてこのことを探る事を目的とする。ある程度の分量を有し、入手年代(写譜年代)のはっきりした物が多く、そして特定の個人に帰属することが明確なこのコレクションは、このような研究をする上での貴重な資料であるといえる。

まず、ペーリッツのプロフィールとコレクションの内容を明確にする。これらと当時のその他の知識人たちの蔵書目録も用いて批判的に比較しながら、18世紀後半から19世紀前半のドイツにおける知識人たちが行った音楽活動の規模、ジャンル、彼らのキャリアと音楽活動の関連をおおまかに明らかにしていきたい。

2. ペーリッツについて

彼のコレクションを見る前にその経歴を、彼の遺産文献目録(以下「目録」)¹に詳述されている自伝によりながら簡単に確認しておきたい。

Karl Heinz Ludwig Poelitz ペーリッツは1772年Ernstthal生まれで1839年ライプツィヒにて没した歴史・国家学者。父親Johann Gotthilf PoelitzはErnstthalのPrediger説教師(牧師)であった。幼少の頃から父親や周囲の人物から個人的に古典語や現代語を学ぶが、父の旧友でHohensteinのカントールをしていたタークChristian Gotthelf Tag²から特に幼い時期から和声の基本を習った。「若い頃の音楽への情熱が続いていたなら、音楽、特に教会音楽を生涯の仕事としていたであろう」と自伝中で当時を述懐していることは、彼と音楽との関わりについての唯一の記録である。

そして、1786年から91年まではケムニッツのLyceum³に通い、91年からはライプツィヒ大学で学び93年にはMagister学位⁴を取得する。95年からはドレスデンのリッター・アカデミーRitterakademieの倫理学・歴史学の教授、1803年にはライプツィヒ大学の哲学担当助教授、1804年にはヴィッテンベルク大学の自然科学・民族誌担当(のちに歴史学に配置換え)教授、1815年には再びライプツィヒ大学に戻り歴史学と統計学(のちに国家学も担当)の正教授となり生涯この地位にとどまる。また1825年にはザクセン王国の宮廷顧問官にも就任している。

1 *Katalog der Poelitschen Bibliothek, Leipzig 1839*

2 自伝には「HohensteinのカントールTag」とだけ記述されているが、R. Vollhard. *Geschichte der Cantoren und Organisten von den Städten im Königreich Sachsen. Berlin 1899*によればこの時期にHohensteinでカントールをしているTagはChristian Gotthelfしかいないので、このように特定した。

3 ギムナジウムに相当する大学進学前の学校。

4 現在と学位システムとは違って、いわゆる現在のDoctorにあたる。当時Doctorは主に医学部、法学部、神学部の学位であり、Magisterはその哲学部の学位にあたる。

3. ペーリッツ・コレクションの概要⁵

ペーリッツ・コレクションとはライプツィヒ市立図書館の音楽図書館に請求番号 Mus.Ms.Poel と付けられたペーリッツの蔵書に由来する一連の楽譜群のことである。ペーリッツの手からどのような経路で市立図書館の所蔵となったのかは依然不明である⁶。

しかしそのことを示唆するものとして、彼の蔵書は死後ライプツィヒ市に遺贈されることになっていることが蔵書目録に記されていることがあげられる。ただし、この目録には音楽理論書は掲載されているが楽譜類は全く掲載されていないので、同様に楽譜類も取り扱われたのかどうかは定かではない。それゆえ一つの可能性としてのみ楽譜類も蔵書と同じく取り扱われてライプツィヒ市に遺贈され、当時すでにあったライプツィヒ市立図書館の蔵書となったと考えることができる。このことを明確にするにはさらに市の公文書館などの記録などから探る必要があるので、他日を期したい。

4. ペーリッツ・コレクションの内容

ここで、このコレクションの内容を示してどのようなジャンル、どの程度の規模の音楽をペーリッツが所有した音楽活動していたか探ることを試みたい。ただし、390あまりの膨大な量であり、この限られた紙面ですべての題目を記すことは許されない。そこで、ジャンルと音楽の規模の両面から整理し集計した数字から読み取ることとする。

ジャンルと規模の分類を兼ねた本論での整理カテゴリーを作るために、とりあえず従来の音楽ジャンルの分け方を援用したい。また全ての細かな楽器編成の違いまでを指摘しては、細分化されすぎて整理する意義が失われかねない。そこで、さしあたり規模の観点から一般的に大規模なものと考えられる管弦楽（管楽器と弦楽合奏が基本）が加わるか否かで分ける。そこでとりあえず協奏曲、交響曲、オペラ、管弦楽と独唱、合唱が入る大規模宗教曲のカテゴリーが出来る。

オーケストラを含まないものに関しては、特に鍵盤楽器が絡むか否かで分けることとした。これはあくまで便宜的であることもさることながら、一般論として当時は一般家庭に鍵盤楽器が普及し始めた重要な楽器であることを考慮してのことである。ここから本論の整理上のカテゴリーとして、鍵盤楽器ソロ曲、オルガンソロ曲、鍵盤楽器の連弾曲、鍵盤楽器が含まれる室内楽（他の楽器の伴奏付き鍵盤楽器ソナタ、ピアノ3重奏など）、鍵盤楽器が含まれない室内楽（たとえば、弦楽4重奏、無伴奏ソロソナタなど）、あと、歌が関連するものとしてオペラのヴォーカルスコア（ドイツ語で Klavierauszug と言われるもの）、リート（ピアノ伴奏つき歌曲全般）が想定される。さらにこれに練習曲と音楽理論書⁷も上記とは関係のない独立カテゴリーとしてふくめる。

これらのカテゴリーで区分し集計してみた結果、以下の通りになった。

カテゴリーごとの集計

理論書：16 そのうち教本：5（音楽全般2、通奏低音1、オルガン1、声楽1）

エチュード：0

鍵盤ソロ；オルガン以外：101

オルガン：31

鍵盤・連弾：54

室内楽（鍵盤楽器を伴う）：86

室内楽（鍵盤楽器を伴わない）：4

管弦楽曲・協奏曲：8

管弦楽曲・交響曲：1

歌曲：20

宗教曲（管弦楽伴奏あり）：56

宗教曲（管弦楽伴奏なし）：10

5 図書館側には特別なコレクションとしての意識もなく、この楽譜類が単に彼に由来するということだけのようであるが、便宜上本論ではコレクションとしておく。

6 音楽図書館の主任に問い合わせたが、把握していないようである。

7 理論書に関してはペーリッツの蔵書目録掲載の物を含めている。

オペラ⁸（管弦楽伴奏有り）：14
オペラ（ヴォーカルスコア）：8
その他：2（無伴奏合唱曲：1、上に分類されない管弦楽曲：.1）

器楽・声楽別の集計

全体：394曲

そのうち管弦楽を含む曲：79曲
そのうち管弦楽を含まない曲：315曲
そのうち鍵盤楽器を含む曲：300曲

器楽：285

そのうち鍵盤楽器を含む楽曲：272曲
そのうち管弦楽を含まない楽曲：276曲
そのうち管弦楽曲を含む楽曲：9曲

歌がある曲：109

そのうち管弦楽を含まない楽曲：39曲
そのうち管弦楽を含む楽曲：70曲
そのうち宗教曲：66曲
そのうち鍵盤楽器を含む曲：28曲

カテゴリー分けの集計を単に個別に見た場合、顕著に多いのは鍵盤楽器、特にオルガン以外の鍵盤楽器で、ついで鍵盤楽器を含む室内楽作品、そして連弾、宗教曲の順である。単純に上位を占めるものだけを見ていくと鍵盤楽器を中心とした小規模作品が多い傾向にあると考えられる。

管弦楽を含む曲は室内楽の総数と比較すると少数派となる。しかしそのなかでも、管弦楽曲のみを見たときに特徴的なのは、交響曲と協奏曲の比較では協奏曲の方が多く、しかも協奏曲は全てソロ楽器が鍵盤楽器であることである。ここにも鍵盤楽器への指向が見られるとあってよいだろう。また、管弦楽付きの宗教曲が多いことは特筆に値するであろう。また、オペラでは総数としては少ないものの、オーケストラ付きのスコアの方が多くことが指摘できる。

これは、いわゆる音楽職に就いていたわけでもないペーリッツに比較的規模の大きな音楽、特に宗教音楽の分野で関われる機会が少なくなかったことを示唆している。

5 その他の知識人たちのレパートリー

では、このようなレパートリーはペーリッツ特有の物だったのだろうか、それとも当時一般的なものであったのだろうか。そこで分かる限り当時のその他の知識人たちの所蔵レパートリーとともに比較検討を行ってみたい。

ここで主に資料として用いるのは当時のオークション用蔵書目録である。当時書籍類は所蔵している人物が亡くなるとオークションにかけられることがあった。その際オークションを開くに当たって前もって目録を作成し出版していた。このような目録は現在でも現地の図書館に残っており見ることが出来る。

実際に筆写が目にすることが出来た楽譜類を含む蔵書目録は28人分⁹である。その28人分をペーリッツの際に行った同じカテゴリー分けで整理し集計した一覧表が次ページの表1である。便宜上管弦楽が含まれるもの（編成が比較的大規模な曲）は網掛けにしてある。表の下段最後には、該当するジャンルの音楽を持っている人物の人数の合計と、所蔵のべ数を合計してある。

オルガン以外の鍵盤楽曲に関してはほとんどが楽譜を所有しているのに対して連弾、オルガン曲は少ない。小編成室内楽に関しては、鍵盤楽器を伴った楽曲を有する人の方が多い。

管弦楽の入った曲に関しては、Müllerの協奏曲とEckの宗教曲の突出した数字を除いてほとんどは0、

8 オペレッタ・ジグシュピールも含む。また、管弦楽伴奏付きアリアも規模の面から考えてこちらに含めた。

9 本論末に一覧を掲げておく。

多くて5点であり、またオペラのフルスコアに関してはWeiß一人のみである。このことから管弦楽を伴った比較的大きな曲と関わる人物は少なかったといえる。だが、協奏曲と交響曲は両者とも少ないながらも協奏曲の所有者の方が比較的多いことは指摘できる。

歌曲に関しては19人が楽譜を有しており、しかも鍵盤楽器と同様に比較的多くの点数を持つ人がいることが注目される。また宗教曲、オペラに関しても、管弦楽伴奏よりも小規模なピアノ伴奏・オルガン伴奏の物が多い。

以上この28人からは全体を通して鍵盤楽器、歌曲への偏重が見られること、管弦楽が加わる曲を有することはまれであるが、協奏曲への好みが比較強かったことが考えられる。

このこととペーリッツ・コレクションの傾向を比較すると、ペーリッツの室内楽、鍵盤楽器への偏重は同様であると指摘される。管弦楽曲に関しては協奏曲・交響曲の合計数の割合が全体の中で特に小さく、そのなかでも協奏曲への指向が若干あることは同様といえる。それに対してペーリッツが管弦楽つき宗教曲の点数が多いことは特異な事と言える。さらにオペラに関しては28人の集計では有していたとしてもヴォーカルスコアであったのに対し、ペーリッツは所有点数で言うと管弦楽を伴ったフルスコアの方が多くなっている。

このことから、ジャンルと規模の両側面から見ると当時の知識人たちは、鍵盤楽器のソロや鍵盤楽器を伴った小編成曲、もしくは鍵盤楽器伴奏を伴った歌曲・オペラを中心レパートリーとしていたと考えられる。しかし、ペーリッツのように管弦楽を伴った音楽との関わりのある人物は特例と考えられる。

6 教則本とレパートリーの関連

これまではペーリッツの蔵書を中心に18世紀後半から19世紀初頭までの楽譜とそのレパートリーを見てきた。さらにこれ以外に理論書を所有していることも指摘される。ペーリッツと先の28人の中で23人は理論書を所有しておりそのうち19人が何らかの音楽の教則本を有していることが分かる。

ここで、ペーリッツ並びに先の28人が所有している教則本について誰がどのような種類の教則本を有しているか集計した結果だけを見てみることにしたい。

Poelitz : 音楽全般2、通奏低音1、声楽1

Bloch : 通奏低音1

Böttiger : 音楽全般1、通奏低音1、
ヴァイオリン1、ギター1

Carus : ギター1

Cäser : 音楽全般1

Dindorf : 音楽全般1、通奏低音2、声楽1

Eck : 通奏低音1、オルガンペダル1、

Eberhard : 音楽全般1、作曲1、
鍵盤楽器1、ヴァイオリン2

Hake : 音楽全般1、鍵盤楽器1

Jahn : 通奏低音3、鍵盤楽器1

Kuhl : 鍵盤楽器2、声楽1、鍵盤と声楽1

Kühn : 通奏低音1、鍵盤楽器1、ギター2

Lange : 鍵盤楽器3

Müller : 鍵盤楽器2、声楽1、
ハーモニカ1

Platner : 鍵盤楽器1

Roch : 鍵盤楽器1

Rodde : 通奏低音1、作曲1、鍵盤楽器1

Spizer : 前奏曲（即興）1

Tzschucke : 鍵盤楽器1

Werner : オルガン1、声楽1

この一覧の半数ほどが鍵盤楽器教本を有することはさておいても、KühnとBöttigerとCarusはギター、BöttigerとEberhardはヴァイオリン、とそれぞれに得意・愛好した楽器が伺える。しかし、彼らの蔵書目録にはそれぞれの該当する楽器の楽譜が多く掲載されているわけではない。このことから、楽譜類については蔵書目録には反映出来ていない物も多いと考えられる。

比較的多く目につくのは鍵盤楽器と通奏低音の教本である。鍵盤楽器に関しては、先ほどのレパートリーの調査結果と同様鍵盤楽器への偏重が見られるのと軌を一にしていると思われる。しかし、通奏低音に関しては楽器を演奏技術を習得することを越えた知識・技能であり、また同時に作曲の基本と当時はされていた。このことから当時は職業音楽家はない愛好家たちも演奏をする以上の技術と能力を身につける人も少なくなかったことがはっきりわかる。

このことをさらに裏付ける資料としてG. Ph. Telemannの孫であるM. Telemannが1773年に著した通奏低音教本¹⁰につけられた予約購入者名簿をあげられる。ここには、121人の購入予約者が記されると同時にその一部の購読者の職業・身分が記されている。そのなかで、職業音楽家は40人である。そのほかは、貴族や学生、身分の高い女性が20人おり、職業・身分のはっきりした人物だけで集計すると、3分の1は職業音楽家以外に売れた可能性があることが言える。

7 キャリアとレパートリー

ペーリッツは390あまりの楽譜（手稿譜）を有していたが、彼の生涯のどの時期にどのような音楽を集めたのであろうか。時期ごとの特異な点はあるのだろうか。本論の最後に知識人のキャリアという点から音楽レパートリーを見てみることにしたい。

全てではないが多くの手稿譜については入手時期（写譜時期）がペーリッツの手によって記入されている。これとあらかじめ本論の2にまとめておいた簡単な伝記情報を利用して、彼のキャリアを在学したもしくは在職した大学や学校で区分してみる。そうすると時期の分け方は以下の通りとなる、

- ① 1772-86（ケムニッツのリツェウム入学以前）
- ② 1786-91（ケムニッツのリツェウム在学時代）
- ③ 1791-93（ライプツィヒ大学生時代）
- ④ 1795-1803（ドレスデンのリッターアカデミー教授時代）
- ⑤ 1803-4（ライプツィヒ大学助教授時代）
- ⑥ 1804-15（ヴィッテンベルク大学教授時代）
- ⑦ 1815-38（ライプツィヒ大学正教授時代）

それぞれの時期ごとにさらにジャンルごとに整理し所蔵点数を集計していくと以下ようになる。

この集計からは、①ケムニッツに移る前、③大学生時代、⑤-⑦大学の教職についてはほとんど入

			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
器楽曲	鍵盤楽器ソロ	オルガン以外	1	31	3	43	0	1	0
		オルガン	0	6	0	30	0	1	0
	連弾	0	3	3	0	0	4	0	
	室内楽	鍵盤楽器あり	0	26	0	60	0	0	0
		鍵盤楽器なし	0	0	0	1	0	0	0
	管弦楽	協奏曲	0	6	0	0	0	0	0
交響曲		0	0	0	0	0	0	0	
声楽	歌曲	0	3	2	2	0	0	0	
	宗教曲	管弦楽つき	0	33	0	0	0	0	0
		管弦楽なし	0	5	0	0	0	0	0
	オペラ	管弦楽つき	0	10	0	1	0	1	0
ヴォーカルスコア		0	2	0	4	0	0	0	

手していないこととなる。しかしケムニッツに移る前の所有楽譜に関しては幼少時代に父の知り合いであった Tag に音楽を習っていることから、音楽に取り組まなかったことは考えにくく、このコレクションに含まれることなく散逸してしまったと考える方が妥当であろう。

それに対して、注目すべきは、ケムニッツ時代とドレスデン時代であろう。この表からはペーリッツの手稿譜のかなりの部分がこの両方の時代に由来すると考えられる。そこで特にレパートリーの面からこの両時期を比較してみたい。

オルガン以外の鍵盤楽器についてはそれほど差はなくドレスデン時代の方が若干多いと見ることができる。オルガン曲はそもそもの母数がすくないとはいえケムニッツ時代に集中している。

連弾曲はほとんどドレスデン時代に集中している。室内楽に関しては鍵盤楽器ありのものが同様にドレスデン時代に多い。協奏曲はケムニッツ時代が6点であるのに対してそのほかは0点、歌曲はほぼ変化無しで、宗教曲が管弦楽付きの物がケムニッツ時代に33点も見られる。オペラに関しては管弦楽付きのフルスコアはケムニッツ時代に10点あるのに対してドレスデン時代には1点しかない。逆にヴォーカルスコアになるとこの関係は逆転する。

これらの比較から、ケムニッツのリツェウム在学中には協奏曲が集中したり、管弦楽付きの比較的大規模な宗教曲やオペラが集中していることから、ペーリッツはケムニッツ時代に管弦楽との関わりをもつ機会が多かったと思われる。

また、母数は少ないながらも小規模宗教音楽やオルガン曲もケムニッツ時代に集中していることは、大規模宗教音楽の集中と勘案すると規模の大小にかかわらずケムニッツ時代に宗教音楽と関わるが多かったということも言えるだろう。

それに対してドレスデン時代は、オルガン以外の鍵盤楽器ソロ曲か編成の小さな鍵盤楽器付き室内楽、連弾曲といった、世俗的な小編成楽曲を中心とする傾向にある。

ここで、この両者の所属、つまりリツェウムとリッターアカデミーの学校としての性格からこの差を考察してみたい。リツェウムは一般的にギムナジウムと同種の学校であり、多くは教会に付属してラテン語を中心とした一般教養を教授する学校施設である。当時は統一された学校制度がまだ確立されていないのでレベルの差があったが、通常この種の学校は大学に進学前の教育を施し、場合によっては大学レベルの教育を施すところがあったという。その類の学校ではカントールと呼ばれる学校教師兼音楽教師が生徒に音楽の教授を施して、母体となっている教会での教会音楽を担当することが多かった¹¹。

例えば J.S.Bach がライプツィヒのトーマス教会付属学校のカントールを勤め、オーケストラ付きの宗教曲であるいわゆる「教会カンタータ」を作曲したことはよく知られている。おそらく、ペーリッツの通ったリツェウムはバッハのそれと類似した環境を有していて、生徒として何らかの形でそれに関わる中で、このような手稿譜を手に入れたのではないだろうか。とくに、幼い頃から専門的に音楽を学んできたペーリッツがその中で中心的な役割を果たしたことは十分に考えられる。

それに対してリッターアカデミーは貴族が貴族に必要な学問をとたしなみを身につける学校であり、その貴族のたしなみの中に音楽が含まれていた。音楽能力を身につけた若い貴族たちとの余暇の楽しみとして室内楽を中心にペーリッツが楽しんだことは十分に考えられるし、また音楽能力を身につけた倫理学歴史学担当の教授として、彼らの音楽教授を引き受けたことも考えられるだろう¹²。

ペーリッツのようにリツェウム（もしくはギムナジウム・ラテン語学校）に通い、その後大学生となって学位を取得し、リッターアカデミーのような学校の教師を経て場合によっては大学の教師になることは当時の知識人のキャリアとしてはごく普通のことである。このような知識人が通常たどるキャリアには活発な音楽活動と関わり合う機会が多い。ペーリッツのレパートリーを元にした本考察はそのことを如実に表していると考えられる。

11 その代表例が現代も存続しているウィーン少年合唱団、ドレスデンの聖十字架教会少年聖歌隊、ライプツィヒの聖トーマス教会少年聖歌隊である。

12 こうした音楽と関わる教職を勤めつつ、大学教授となった人はいる。例えば、C. A. Grenser の *Geschichte der Musik in Leipzig*. Leipzig 1840(R2005)によれば1773年にライプツィヒのニコライ学校のカントール M. Funke がライプツィヒ大学の物理学担当教授となっている

まとめ

今回の考察の対象であった音楽職には就かなかった知識人たちの音楽レパトリーは、鍵盤楽器を中心とした小編成に傾いていたと考えられる。そして、ペーリッツのキャリアと所蔵楽譜の入手年代の関係からは、彼らの音楽との関わりはいわゆる一般教養・たしなみとしての音楽もさることながら、知識人だからこそたどるべきキャリアに大きな部分をおっているのではないかと考えられる。

その他方で職業音楽家になった大学生も多くいた事実がある。たとえばバッハのライブツィヒ時代の弟子には多くの大学生がいて¹³職業音楽家になっていった。彼らも大学に入学するまではペーリッツと同じキャリアを積んで、大学中退後¹⁴実際カントールやオルガニストといった学校での授業を兼務した音楽職に就く者が多くいた。

このことと、ペーリッツが大学職就任後に急激に手稿譜の入手数が減っていることを重ね合わせると、従来ひとくりに知識人たちとよんできた人の中には、音楽職に就くことを目標にした人と、そうではない人との間には大きな差があり、実際に知識人たちの活発な音楽活動の中心となっていたのは、ペーリッツや比較対象にした28人のような人物ではなく、むしろ前者のような人のみだったと考えられないだろうか。

主要引用・参考文献

C. A. Greser. *Geschichte der Musik in Leipzig*. Leipzig 1840(R2005)

小野亮祐『バッハの「弟子」に関する社会史的研究』広島大学教育学研究科修士論文 2001

M. Telemann. *Unterricht im Generalbass*. Hamburg 1773

Katalog der Poelitschen Bibliothek, Leipzig 1839

R. Vollhard. *Geschichte der Cantoren und Organisten von den Städten im Königreich Sachsen*. Berlin 1899

オークションカタログ一覧（紙面の関係で各カタログの所蔵主の名前と出版年だけ挙げておく）

Cerl Bernhard(Leipzig 1810)

Marcus Elieser Bloch(Berlin 1800)

Carl August Böttiger(Dresden 1836)

Karl Adolph Cäser(leipzig 1811)

Friedrich August Carus(Leipzig 1807)

Carl Friedrich Dauthe (Leipzig 1817)

Gottlob mmanuel Dindorf(Leipzig 1813)

Christian Friedrich Eberhard(Halle 1829,
gestrb. i. J. 1818),

Johann Georg Eck(Leipzig 1812)

Ernst A. V. Hake(Leipzig1843)

E. B. G. Hebenstreit(Leipzig 1805)

Ernst Wilhelm Hempel(Leipzig 1800)

Carl Friedrich Hindenburg(Leipzig 1809)

Carl August Kuhl (Leipzig1841)

Carl Gottlob Küttner(Leipzig 1840)

C. August Jahn(Leipzig 1811)

Carl Gottlob Küttner(Leipzig 1812)

A.Lange (1832)

Carl Wilhelm Müller(Leipzig 1801)

Friedrich Passow(Breslau 1833)

Johann Nathaneal Petzold(Leipzig 1816),

Ernst Platner(Leipzig 1820)

Johann Christian Friedrich Roch (Leipzig 1803)

Drothea von Schläzerschen(Leipzig1832)

Freidrich Spitzner(Leipzig 1842)

Carl H. Tzschuke(Leipzig 1814)

Christian Felix Weiße(Leipzig 1806)

G. W. Werner(Leipzig 1841)

13 小野亮祐『バッハの「弟子」に関する社会史的研究』広島大学教育学研究科修士論文 2001にくわしい。

14 当時はほとんどの学生が中退した。